

No. 69

1985.

3. 20

岐阜の博物館

編集兼発行
▽501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL (05752) 8-3111(代)
振替 名古屋 6 37909

地域に生きる博物館



ここ数年、市町村立の民俗歴史資料館が設置され、地域の文化財整備が進んでいます。協会加盟博物館等も80館を越えるまでになりました。そして、県の博物館も発足して10年を迎えようとしています。ようやく収蔵資料も増加し、資料情報センターとして機能しはじめました。各地域

に多くの博物館相当施設が建てられる中で、それぞれの地域博物館や県博物館はどのような方向で活動を進めていったらよいのでしょうか。それぞれの館が、地域の要求に答えられるように、主体的に、長期的展望のもとに調査研究、資料収集していく必要があります。同時に、館の一人相撲でなく、協会に属する館同志が横のパイプを保ち、お互いに協力し合う時がきているように感じます。少ない館員で、地域の要求を満たす企画・資料・研究には無理があります。

県博物館や美術館が行っている移動展も、地域住民への文化的サービスですが、本当に地域の人々が望んでいる内容かどうか主催者側の一方通行になってはいないだろうか。

“もの”を見せて終る博物館の時代は過去のものになりました。博物館も時代と共にたえず進歩しなければなりません。同じ展示が続けば、人々は学習意欲を失い、博物館は収蔵建物となってしまうでしょう。

川島町に“ふるさと史料館”があります。ここには意欲的に活動しておられる岩田さんがお

られます。年間10回程度企画展を実施し、木曾川に関係する展示や資料の収集にあたっておられます。県博物館へも何度も足を運ばれ、自分の館で利用できる資料があるかどうか調査し、企画上必要な資料を借用し展示されています。そのひとつに“木曾川展”がありました。木曾川の魚類標本を展示したり、漁具を展示されたのですが、魚類は、すべて県博物館からの借りものでした。その結果、川島町でも常に見せる標本があったらという要望から、県博物館も協力して標本を作ることになりました。偶然ですが、県博物館も、資料紹介展の企画で“ふるさとの魚”を予定しており、川島町から漁具を借用することにもなって、魚の採集も協力して行うことになっています。

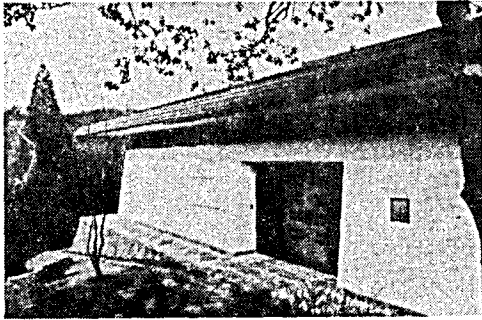
川島の例は、小さなことかも知れません。けれど、館員の少ない館で、企画展を開催することは大変な苦勞です。お互いの館が協力し合い、共同で調査・研究を実施すれば、その成果は広がりを持ってきます。県博物館と地域の資料館との関係も同様です。資料情報センターとして県博物館の機能も充実されるはずで、地域の館は、県博物館の援助を求め展示に広がり、と深みを持たせることが可能になります。

問題がないわけではありません。館員の特殊性はあまり理解されておらず、要望に応じて簡単に対応できにくい事情があります。県博物館とて、地域の要望に応じることのできるメニューも用意できていません。建物があり、その中に“もの”が置かれているだけの館から“もの”が生きる館になるように、お互いに努力すべきときです。

(S. ANDO)

豊蔵資料館 (財団法人)

▽ 509-02 可児市久々利大萱
TEL. 0574-64-1461

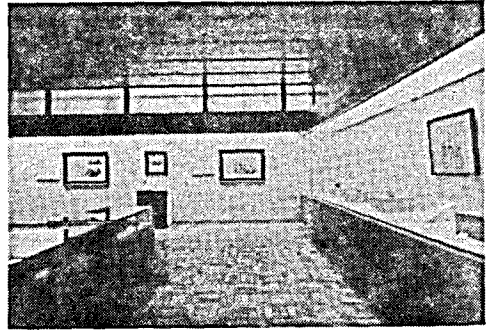


(資料館入口)

財団法人荒川豊蔵資料館は、人間国宝の陶芸家、荒川豊蔵さんの作品を集め、その業績を保存するとともに、一般への公開を目的として、昭和59年4月に開館しました。建物は、荒川さんの陶房近くの山林内にあり、鉄筋平屋建てで約280㎡、銅板ぶき白壁塗りの落ち着いた雰囲気のものであります。内部には、展示室の他に、収蔵庫、茶室、談話室、ロビー等が設けられています。

収蔵品は、荒川豊蔵さんの作品を中心に、荒川さん自身が、長年にわたって収集された古陶器、陶片、諸外国の陶磁器、古書画、参考作品など約2,000点に及んでいます。陶片の中には、荒川さん自身が、昭和5年に牟田洞窯跡で発掘された「志野筒絵陶片」があり、これは、志野

(収蔵庫)



(展示室)

発祥の地を立証するきっかけとなり、わが国陶磁史上の大発見となった貴重なものです。自作の中には、荒川さんが愛妻に贈られ、門外不出を命じられた「志野筒絵筒茶碗」もみられます。

荒川豊蔵さんは、明治27年生まれ、陶磁器商人を経て大正末から陶芸界入り、昭和8年より現在地に陶房を構えられて焼き物に専念されてこられました。昭和30年に、志野と瀬戸黒の技術で重要無形文化財「人間国宝」に指定され、昭和46年には文化勲章を受賞されました。

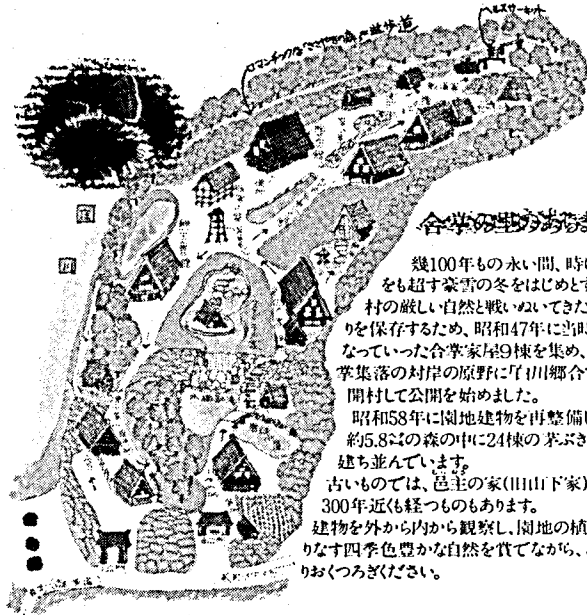
桃山茶陶の志野の名品が、美濃の陶工たちの時代の先端を行く創意工夫の中で焼かれたというこの東濃の里山地内、その歴史のゆかりの地に、荒川豊蔵記念館が誕生したことは、焼きもののふるさと東濃の顔であるだけでなく、岐阜県の文化の顔ともいえます。

開館は、毎週土曜日・日曜日と祝日で、午前10時から午後3時30分まで、入館は無料です。可児郷土館から当資料館、土岐市美濃陶磁歴史館、瑞浪陶磁資料館と、東濃路の陶磁器関係博物館めぐりはいかがでしょうか。

(応接間兼図書資料室)



白川郷合掌村が白川郷合掌の里に！



合掌の里のあらまし

幾100年もの水い間、時には4に
をも超す豪雪の冬をはじめとする白川
村の厳しい自然と戦いぬいてきた合掌造
りを保存するため、昭和47年に当時廃屋社
になっていた合掌家屋9棟を集め、伏町合
掌集落の対岸の原野に「白川郷合掌村」を
開村して公開を始めました。
昭和58年に園地建物を再整備し、現在
約5.8haの森の中に24棟の茶ぶき屋根が
立ち並んでいます。
古いものでは、邑主の家(田山下家)のよう
に300年近く経つものもあります。
建物を外から内から観察し、園地の植物が織
りなす四季色豊かな自然を賞てながら、ごゆっ
りお過ごしください。

これまで村立であったものが、昭和58年に再整備され、財団法人白川村緑地資源開発公社の管理に移り、名称変更だけでなく内容的にもいっそう充実しました。新しい入園受付の家屋は、白川村や合掌の里で生産された民芸品・農産加工品の展示即売場になっています。すぐ隣の芸能堂では、定期的に民踊などの郷土芸能が実演されます。これまでのように建物や民具を見せるだけの静的なものから、動的で参画的なものへと発展しました。

茶わん・壺などを製作する焼きものの家陶芸

(水織音の滝)



の館、木地挽物・木彫りなどの伝統工芸品を作る木工所としての木工の館、竹細工をはじめ数多くの民芸品を実際に生産再現する細工・工芸の館の他、炭焼小屋、水車小屋、茶室等が目をひきます。

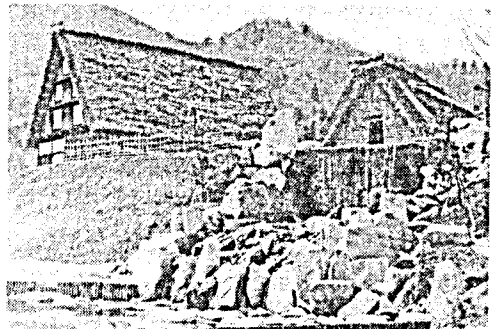
この新しい合掌集落の最奥地には、ヘルスサーキットと呼ばれるフィールドアスレチックが整備され、ここから庄川沿いの雑木林の中を入園口まで帰るコースとして、ささやきの森・童謡の森、さえずりの森と名づけられた自然遊歩道がつくられています。ナラ類を主とした落葉樹林は、新緑よし、夏の深緑よし、秋の紅葉、冬枯れもよし……と、四季折々の美しさをみ

せてくれます。民俗・民芸といえども、その土地の自然条件をぬきにしては考えられないだけに、今後合掌の里全体の中で、この地の「自然」をどのように展示内容にとり入れるかが最大の課題といえそうです。

年中無休で、8月は8時～18時、12月～3月は、9時～16時、それ以外は8時30分～17時の開園です。入園料は大人500円(400円) 小人250円(200円) ()は25名以上の団体、高校生団体は300円です。

TEL 05769-6-1459

(残雪の山にはえる合掌の里)



半原版画館をつくって (2)

糸魚川 淳 二

開館からしばらく続いたざわめきが消えて、版画館は落ち着いた日々を迎えました。しかし、来館者は続きました。案内を出した知人、近所の人たち、テレビや新聞で知り、興味を持って来て下さった方々、そして、通りすがりの人、と様々です。

福井からはるばるやって来て下さって、一度目はお休み、再度訪ねて来られた今立町の和紙を守る会の方たちとの対面は喜びでした。その中の二人はリトグラフィの刷りをやっておられる方で、紙の話、版画の話に花が咲きました。

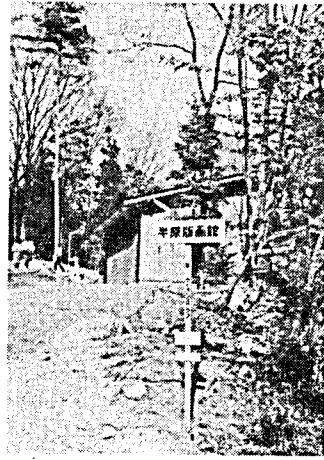
名古屋から来られた、印刷業のおじいさんは、昔、小僧として印刷所に奉公し、叱られながら石版石に画を写したとのこと、本当になつかしそうです。一度お訪ねして、昔の話を聞きたいと思っていますが、仲々実現しません。陶芸その他の美術をやっておられる方たちは、この地方に結構多くて、何人かが訪ねて下さいました。

都合のつく限り、お茶を出してお話をするということにしているので、大変ですが楽しみです。専門的な話から昔のこと、今のこと、季節のこと、食物のこと、なんでもよいのです。お年寄りとも若い人とも、話題はつきません。

版画館のまわりは雑木林で、アベマキ、ヤマザクラ、ホオノキ、カシの類、カエデの類、アカマツなどが混生しています。春になって芽を出し花が咲いた木々は、やがて生い繁って夏を迎えます。秋になると紅葉し、そして葉を落して冬の到来となります。四季それぞれの環境はすばらしく、その一年の移り変りの見事さは都会では絶対と言っていい程、味わえないものと言えるでしょう。

来られた方の大部分が、展示よりもまず、まわりの様子に感心され、「いゝ所ですね」と賞められる程です。こちらとしては、「展示もい

いでしょう」と言いたい所ですが、こういういいふん囲気の中に版画館があり、自然の光も十分に取り入れ、まわりの景色を借景として展示を構成していると思えばいいのですから、気にはなりません。



はなりません。困ることもいくつかありました。限られた日時しかオープンしていないので、仕方のないことですが、決った日以外に来られる方があることです。

はるばる来て下さったのですから、都合のつく限り見て頂いていますが、それも度重なると、負担になって来ます。道路際に、休みの表示はあるのですが、気がつかれない方が多いのです。

それと驚いたのは、黙って入って来られる方があったことです。物音がするので行くと、人がいて、見ておられるのにびっくりしました。公の館で無料ならば、それでもいいかも知れません。しかし、プライベートの場では一寸困ります。この次からは、一声かけて下さるようお願いして、見て頂きました。

展示の方は、しばらくして変化がありました。瑞浪市にある丸印印刷の伊藤さんが、石版印刷機を見つけ来て下さったのです。犬山の近くの印刷屋さんで雨ざらしになっていたとかで、きれいにさびを落とし、塗装し直した機械は、展示の巾を拡げました。岐阜市の版画家、広江さんから頂いた石版石・石版材料と相まって、石版刷りの説明ができるようになりました。将来は、実際に刷って見せることができれば、など

と夢を見ております。

東京の今野さん作のスティンド・グラスも窓に入りました。中から見ても、夜、室内に灯を入れて、外から見ても見事です。ヨーロッパの古い時代の伝統あるパターンと淡い色が、石版画の展示とうまく調和したから不思議です。

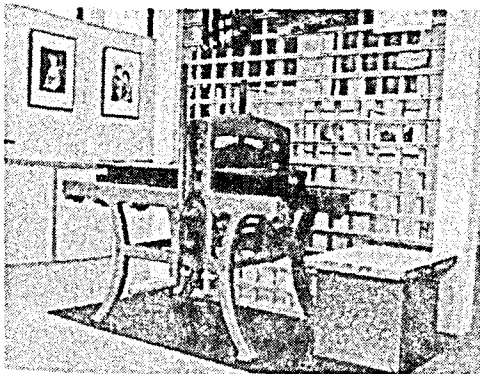
季節ごとに展示を変えました。石版画の最初は春らしく、桜の風景、美人を初めとして、代表的なものにしましたが、夏休み前に、夏の絵にしました。うちわを持ったゆかた姿の女性、はだかの子供たち、風景も水のある景色を選びました。大正・昭和のうちわ絵も並びました。

秋に入って、少し落ちついた展示にし、風景は東京、女性も菊や紅葉をあしらったものとなりました。現代版画の方は、これといったテーマはなく、コレクションの中から、気に入ったものを順にかけている、そんな具合です。

ガラスも、夏は氷鉢が中心でしたが、秋に入って、塗り椀にしました。椀の方に栗の実、蓋の方に実をつけた植物の絵のあるものです。上手物ではありませんが、面白いものです。

正月の5日間が一年のしめくりです。引札・大小を展示し、義父から借用の掛軸を10本ほど掛けました。江戸時代の、「四条・円山派」が中心です。今まであまり興味がなかったのですが、よく見れば絵はよく描けており、感心しました。古画の見直しといった所です。

こうして9ヶ月が過ぎ、1・2月の休みに入りました。ほっと一息入れましたが、もう2年目が3月から始まります。次の展示の準備をしなければなりません。今度のテーマは、「時代



的に見た明治石版画」, 「ヨーロッパの銅版画さしえ本」, 「五味一幸展」です。こう書くとは大層なことのようにですが、それぞれを10~30点の作品で構成するのですから、それ程のことはありません。楽しみながら絵を入れかえ、マットを切っています。

このように、どうやら軌道に乗って走り出しました。これからはいろいろなことがあって、対応に困ったり、運営に疲れることがあるかも知れません。個人の手は何といっても小さく、弱いものですから。

たゞ、博物館の基本だけは忘れないようにしたいと思っています。ふところは大変淋しくなっているのですが、ぼつぼつと、コレクションをふやして行こうと思っています。やはり、砂目石版画が中心です。初期の、いいものを、とねらっていますが、最近は少なくなって、仲々見つかりません。ガラスの方は、まだまだあります。人から見ればガラタミたいなものでも、興味を持って見れば結構面白いのです。こまめに歩きまわって、探し出したいものです。

展示の方も、いろいろ工夫して、バラエティのあるものにしたいと思っています。一度来られた方たちが、「展示が変わったはずだから、行って見よう」と思って下さることが大切です。何度も来て頂けば、来館者がふえ、定着することになるわけですから。

行事についても考えています。今の所何ともありませんが、画家の方の話、音楽会ができなにか、など空想をしています。一方、5月1日から、瑞浪陶磁資料館で、コレクションの一部を、「ガラスの飲食器」という特別展として出品することになりました。見て頂くチャンスをつやすという意味で、大歓迎です。

この版画館を始めたことで、新しい世界が開けました。多少辛かったけれど、面白い一年でした。持ち出しばかりですが、皆さんに喜んで頂けることが何よりのほうびです。

これからも、多くの方々によって支えられて、ユニークな、小さい美術館として、活動を続けて行きたいと思っています。

フィルム資料の収集に思うこと

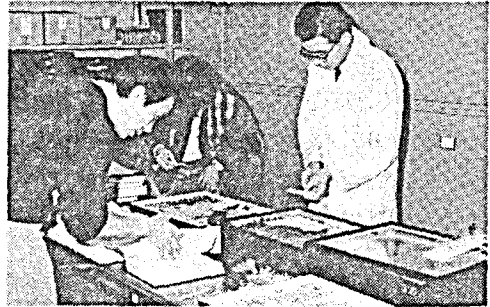
岐阜県博物館 学芸嘱託員 鈴木 功

博物館活動には、資料の収集・整理・保管という3大要素があり、どれを怠っても博物館は成り立たなくなってしまいます。その中でも資料の収集は、他の2つの素となるもので、より慎重に考えなければならないことでしょう。資料は、モノ媒体と複製媒体という2種類のものに分けられます。モノ媒体というのは、実物・模型・フィルム・図・文書などを問わず、複製品では役に立たない場合のものをさし、複製媒体は、既に生産された情報の媒体であり、もとのモノと等価値である場合のものをさします。

資料収集の得失を考えると、得を強調し過ぎれば抱え込みになり、環境から離すことによって起こる価値の減殺の原因にもなります。また乱集は、自然破壊、地域文化の破壊のもとにもなりかねません。さらに、収集・整理能力の限界を越えれば、単なる死蔵に終わります。

大収蔵庫を持ち、アルバイトを雇い、つきからつきへと、整理可能なスーパー博物館は別として、大部分の博物館は、スペース的にも、経済的にも限界というものがあります。だからといって収集を怠っては、来館者に対する情報提供や企画展などのサービスがマンネリズムになったり、地方研究者に対するサービス度が低下し、博物館本来の機能に支障を来します。経済的に許す限り収集は意欲的にすべきでしょう。

そこでクローズアップされる学芸員の仕事の一つに、ものを捨てるという作業があり、この行為と判断力は学芸員にはなくてはならない能力の一つです。必要か不必要かという間のラインを決める場合、それを購入した時の価格「もったいない」という欲のようなものが頭をかすめ、使い道がないようなものまでも、置きっぱなしにすることが多々あるでしょう。そこで、このようなことを無くすための方法として、「フィルム」があります。これは視点によって、前



(こうした写真も展示に生きることが……)

に書いた2種類の媒体のどちらにでも変えられる不思議な資料です。また収集の得失から考えてみても、この使用を積極的にすべきでしょう。

フィルム資料の利点の一つとして、フィルムではダイレクトに表わせるもの、例えば学芸員の活動風景などがあり、その極端な内容例では、不必要になった写真を捨てているところが映っている写真というのでもいいでしょう。また「昆虫写真の撮り方」などという企画会を立てた場合のために、ベストポジションより少しピントをずらして映したスライド、あるいは、逆光補正の値を少しずつ変えて映したものを揃えておくのもフィルムならではのメリットではないでしょうか。

資料の選択に必要な価値判断は、このようなことから出てきます。博物館はなぜ企画会や企画展を催すのでしょうか。常設展示だけでは満足しない利用者に対して、集団的サービスを提供するために行うのです。そのためには学芸員は常日頃、長期的な考えを持って、そのための資料収集をしなければなりません。この考えを持っていれば、資料の選択は容易になることでしょう。それによってモノ購入費や収蔵庫などにもゆとりができ、学芸活動がより能率的に回転し、博物館のレベルアップに役立つばかりでなく、地域住民のレベルアップにも役立つことでしょう。

事務局より

「エイス・テン・アゴラーン」

購読のすすめ

建物や施設等の絶対数では、北海道・東京都に次いで第3位にある博物館の世界～それが本県です。しかし、ものを生かして博物館としての活動を支えるのは、博物館専門職としての学芸員及び学芸職員の質と絶対数であることは論をまちません。隣県愛知県の現状と比べてみても、本県の実状はまだまだ後進県であると認めざるを得ません。すでに愛知県では、博物館人の資質向上を目的として「愛知県学芸懇談会」が発足しており、2ヶ月に1回の割合で、博物館学にまつわる諸問題を、テーマを設けて話し合い研修につとめています。次々と博物館が増える社会情勢の中で、博物館の使命を追求し、みんなのためのほんものの博物館の姿を明らかにしようとの熱気につつまれています。

こうした懇談会の貴重な内容を、記録に残すとともに、公にし、より多くの人々の参考に供しようと、本年1月から、「エイス・テン・アゴラーン」(ギリシャ語で“広場の中へ”)と題する小冊子が刊行され始めました。B5判で、昨年11月刊の準備号には、愛知県の「学芸懇談

会」のようすが、くわしい経過報告の形で第6回まで記録されています。本年1月発行の第1号には、「博物館・図書館融合の世界」その1を、日本モンキーセンター学芸部長広瀬鎮氏、特別企画、新春紙上放談「博物館不必要善説をめぐって」「いわゆる小規模博物館の問題をめぐって」を常滑市民俗資料館の中野晴久氏、「小規模博物館における学芸職員の役割」を東海市立平洲記念館の立松彰氏、「視聴覚教育原論粗拙」を岩田洗心館の久田晴明氏が執筆されています。2月発行のVo12-2は、36ページに増頁され、広瀬鎮氏の第2回、久田晴明氏の第2回その他、実務的な博物館学あれこれの諸論文が載せられ、若き学芸員集団の情熱・熱気がムンムンと伝わってきます。年6回の発行予定で、より多くの方々の購読があつてこそ、いっそう充実した内容で発行継続できるとのこと、希望者は、購読料年間1,200円をそえて、犬山市犬山富士見町26 岩田洗心館 TEL0568-61-4634 まで申し込んで下さい。切手でも可。その場合は、100円5枚、60円10枚、10円10枚の組み合わせがありがたいとのことです。銀行口座は、東海銀行犬山支店、普通口座「アゴラーン出版事務局 岩田正人」です。

岐博協セミナー

アンケートのまとめ

昭和60年度岐博協セミナーの計画を立案するに際して、セミナー委員の方々にアンケートをお願いしたところ、次のようなご意見をお寄せいただきました。これらを参考にして3月中旬に予定されている常任委員会で具体案が検討されますが、年4回のセミナーは従来どおり継続していくものと思われま

す。

セミナーに対するアンケート結果

(数字は回答数)

1. 年4回セミナーを実施していますが、このことについてどう思われますか。
 - ・従来どおり年4回でよい。(3)
 - ・年2回(岐阜地区1回、他地区1回)でよい。

(1)

- ・年4回では少ない。(1)
2. 講演会中心のセミナーについて検討を要するとすれば、具体的にどのような内容にしたらいと思われま
- ・普遍的な題材を講演内容とすべき。(2)
- ・テーマを決めて研究会をもつ。(1)
- ・他県との交流をはかる。(1)
- ・講演会一辺倒でなく、文化財探訪、学芸講習会を行う。(1)
3. その他ご希望ご意見。
 - ・県下博物館学芸員の情報交換、資料の交流を推めるため県博が中心的役割をはたす。セミナー委員会の連絡を密にしてPR活動を積極的に行う。

根尾村民俗資料館 4月1日にオープン

本巣郡根尾村の淡墨公園内に建てられていた民俗資料館は、4月1日から正式に開館、能面、菊花石、根尾谷断層模型なども展示されています。村教委では、昨年春から精力的に民俗資料の収集活動を進めてこられ、多くの村民の協力もあって、織機・農機具類、生活用具等数多くの貴重な資料が集められました。目下資料整理作業が進められており、今後は、常設展以外にも、特別展・企画展の中で、これらの資料は活用され、今後も資料収集は続けられていきます。

村民に支えられ、村民に働きかける民俗資料館として、博物館学の理念にそった運営・活動のなされることが期待されます。

県博特別展「濃飛の縄文時代」へどうぞ

縄文時代は、今から約12,000年前に始まり、弥生時代まで約9,000年間もの長い時代であったとされています。美濃に広がる平野、飛騨にそびえる山々、この自然環境の異なる岐阜県において、美濃・飛騨という地域性ある縄文文化が展開していました。今回の特別展では、植生環境の相異を背景に、土器・石器などの出土品を中心に、濃飛に生きた縄文人の生活を紹介します。



(有孔土器・縄文時代前期・高山市内出土)

会期は、昭和60年4月23日(木)～6月9日(日) 5月12日(日)には、「縄文時代の食生活」と題して、国立民族学博物館助教授、小山修三氏の講

演会、5月26日(日)には、信州大学教授大参義一氏の「アフリカ旧石器時代の人類と文化」と題する人文教室、6月2日(日)には、博物館学芸員による「親子考古教室 ― 縄文時代のまつり ―」等多彩な催し物が企画されています。

原稿をお寄せ下さい。

本年度は、異常に発刊が遅れましたが、本紙は季刊で、5月、8月、11月、2月の発行を目標としてしています。各回とも前月末日を原稿〆切りとしますので、企画・特別展・その他各種行事等の情報を、県内ニュース欄用にお寄せください。その他、博物館活動の実践報告、新収蔵資料の紹介、出版物の紹介、博物館界への要望・意見、博物館事業・活動推進上の悩み、等々は、特別〆切日にとられることなく、随時どしどし原稿お寄せください。本音としては、編集係から毎回あちこちに原稿依頼をしているのですが、なかなか集まらなくて困っているのが実状です。一度、エイズ・テン・アゴラーンをお読み下さい。館園の絶対数では、愛知県をしのいでいても、博物館活動実践交流・博物館職員の組織化では、大きく立ち遅れていることを認めざるをえないようです。会員諸館園からのご寄稿を期待しています。

編集後記

◎ほんとうに、ようやく年4回の発行にこぎつけました。以前は年6回の発行でしたから、そのことを思うと、もっともっと定期的に発行できるはずなのにと、編集子の怠慢を反省すること……しきりです。

◎次年度こそは、当初計画通りに定期発行をと意気込んでいます。そのためには、積極的な情報提供、原稿投稿のほど、切に切にお願いしておきます。(・O)

◎博物館職員研修会、悩みを語り合い、それぞれの館の取り組みを話し合う中で協力できる分野が開拓できるはずです。ぜひ実現を望みたいものです。(S.A)